

# ヴェネツィア、サンソヴィーノ、ミゼリコルディア大信徒会

〈ヴァザーリにとて、  
これは「イタリアで最も華麗な建物」だった。  
私たちは、そこをバスケットボールのコートにも使った。〉

## ヤコポ・サンソヴィーノによるヴェネツィアの スクオラ・グランデ・ディ・サンタ・マリア・デッラ・ ミゼリコルディアを巡る未完の物語とその修復 マヌエラ・モッレージ

参照 | 本誌 pp.4-21

1498年、ヴェネツィア。ヴェネツィアのサンタ・マリア・デッラ・ミゼリコルディア大信徒会の本部建物は使用不可能だと、会の運営組織によって発表された。これは1492年以来、同会が十人委員会に文書で報告していた内容の再確認だった。そこで十人委員会は、ヴェネツィア共和国による信徒会監督のために置かれた行政組織として、新本部の建設を許可した。これが長く、波乱に満ちた、現在まで決着のついていない出来事の始まりであり、未完にもかかわらず、巨大さ、建築主の一部の野望、建築家の未熟さゆえに、ヴェネツィアの街並みから完全に浮いた建物

をもたらすことになる。1486年生まれのフィレンツェの彫刻家・建築家ヤコポ・サンソヴィーノは、1527年にローマからヴェネツィアにやってきた。この人物が、大信徒会の会員たちからの依頼を受けて、1531年に干渴の都市で見たこともない古代風のバシリカを建てようと考えた。

ヴェネツィアの信徒会は市民によって構成され運営される組織で、「大」信徒会と「小」信徒会に分かれる。特定の聖人の崇拜に捧げる「大」信徒会は元来5つあった——サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスト(福音書記者聖ヨハネ)、サン・マルコ(聖マルコ)、サンタ・マリア・デッラ・ミゼリコルディア(慈悲の聖母)、サン・ロッコ(聖ロクス)、サンタ・マリア・デッラ・カリタ(慈悲の聖母)。「小」信徒会と同じく、13世紀から14世紀に遡る大信徒会の起源は「バットゥーティ」と呼ばれた信徒組織に関わっている。これは中世にイタリアやヨーロッパの諸都市を練り歩きながら、ペストの流行と同一視された神罰を共同体から遠ざけるための嘆願として、自らの身体を罰する鞭打ち苦行の団体である。「大」信徒会と違い、「小」信徒会は職人組合や職業団体(靴職人、仕立て屋、左官や石工、金細工師……)、もしくは市内に定住した外国人共同体とみなせる。こうした組織の



修復前の2階ホール:  
バスケットボールコートとして使用



修復前の1階ホール:  
スポーツジムとして使用

機能は元来は相互扶助的なもので、貧者への必需品の施し、病人を施療施設に入院させる、裕福でない人々への無償の住居提供、持参金を用意できない家庭の少女への婚資援助、葬式代のない死者をきちんと埋葬することなどだった。しかし15世紀末から、信徒会の財政力の伸長に伴って——金銭と特に不動産のかたちで寄付された多額の遺産によって潤った——一種の変容が起きる。公的扶助に投資し続ける代わりに、信徒会は本部建物の豪華さ、最良の芸術家たちに依頼した絵画装飾、



南側ファサード



北側全景: 右に非常階段を見る

# KWKプロメス

「シュチェチン国立博物館／『大発見』対話センター」

設計＝KWKプロメス

自由解放記念に捧げる静かな声

ジャン＝マリー・マルタン

参照 | 本誌pp.22-33

シュチェチンはベルリンから約150kmの距離に位置し、ワルシャワから400km、グダニスクからは300km以上離れている。同市はポメラニア州都である。1945年のヤルタ会談とポツダム会談でなされた決定に従い、ドイツからポーランドに移譲された領域に属する。この時、オーデル川とナイセ川の流れが両国の国境と定められた。ポーランドへの領土移譲は、プロイセン北部のソヴィエト連邦への併合に対する賠償の一部として決定された。1724年4月22日にイマヌエル・カントが(そして1880年にブルーノ・タウトが)生まれたケニヒスベルクは、1945年にカリニングラードと改称され、現在でもポーランドトリトニアに挟まれたロシアの飛び地となっている。オーデル川の両岸に建設されたシュチェチンには、20世紀の歴史の痕跡が深く刻まれている。その中には、1970年12月から1971年1月にかけて起きた労働者蜂起の痕もある。蜂起は暴力的に鎮圧されたものの、当時の共産党書記長ウラディスラウ・ゴムルカの更迭を招き、1980年のグダニスク海軍造



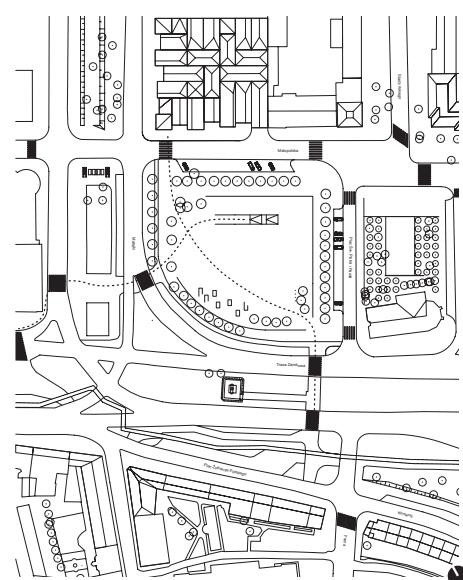
ソリダルノスク広場を俯瞰する

船所でのストライキ、連帶の誕生、最終的に10年後の共産党体制の終焉の序章となった。

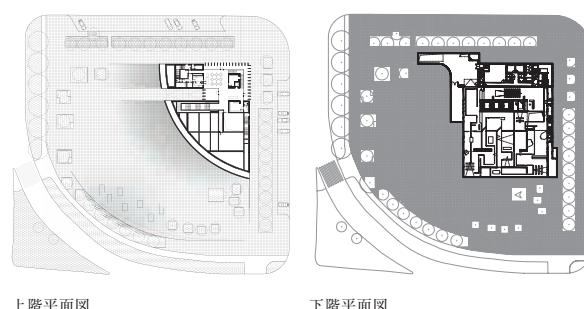
シュチェチンの中心部には現在ソリダルノスク広場がある。1971年初頭をまたぐ数ヶ月間に労働者と警察の衝突の舞台となったこの一帯は、第二次世界大戦中に連合軍の空襲によって更地になるまで爆撃され、連帶を称えてソリダルノスク広場と名付けられた後も、傷口は都市の街並みにぽっかり空いたままだった。このエリアの再開発のために、いくつものプロジェクトが策定され、この場が持つ象徴的な意味ゆえに是認されてきた。例えば、ここには戦時に破壊されたコンサート・ハウスが建っていたが、シュチェチンがドイツのポメラニア地方に属したことを

証言する多くの建物のひとつだった。コンサート・ハウスがあったエリアには、2007年に行われた設計競技の結果、ファブリツィオ・バロッティとアルベルト・ベイガが設計した新ミエチスワフ・カルウォーヴィチ音楽愛好協会が建設された。本誌に掲載した写真からも見て取れるとおり、近年にヨーロッパで実現した中で最も興味深い作品のひとつである(参照:『CASABELLA』847号、2015)。

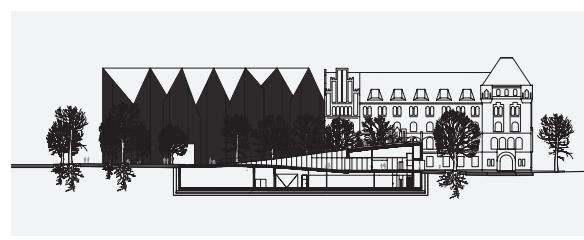
論理的に推定されるように、新フィルハーモニーに劣らず、同じ広場にKWKプロメスの設計案に基づいて2016年に完成した国立博物館も、ポーランドが手にする経済的資源をよりよく活用し、1990年に両国国境と正式に定められたオーデル＝ナイセ線の東側にある、ドイツと奪い合った地域にある諸都市のポーランド的性質を確定し直すために進めている政策に含まれている。特にEUに加盟した2004年以降にポーランドが果たした経済成長を考慮に入れない限り、シュチェチンにおいてもソリダルノスク広場があった空間を回復するために実現されたものの理由と前提条件を理解するのは簡単ではない。2007年から2013年までの時期、ポーランドはEUから800億ユーロの財政援助を受けた。2014年から2020年の間に、EUの構造基金[EU地域間の格差是正のための融資]と結束基金[国民総所得がEU平均の90%以下の国にインフラ、エネルギー効率、再生エネルギーに特化して支援する基金]から820億ユーロ以上がポーランドに投下される予定だ。これらの資金が使われる効果的な方法(10年間で新たに300,000人分の雇用創出、11,000kmの道路と1,660kmの鉄道路線の再建あるいは新設、広範囲の都市再開発など)は、ポーランドの国内総生産がヨーロッパ平均を上回る割合で伸びている理由を一部説明する。最近クラクフで『Form Follows



配置図



上階平面図 下階平面図



断面図



広場全景



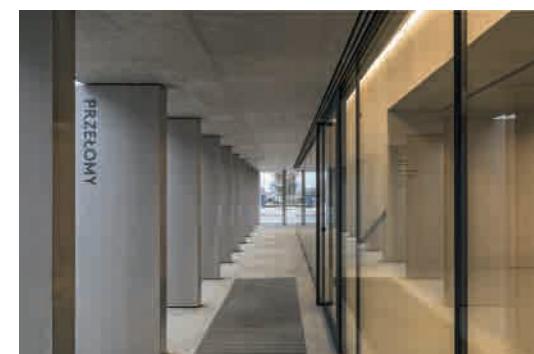
北東のコーナー部



メイン・エントランス:広場側



広場:左はバロツィ/ペイガによる音楽愛好協会



屋外通路

Freedom:ポーランドにおける文化のための建築2000+』が出版されたのも偶然ではない。本誌が指摘したようにイデオロギー的欠陥が多少みられるものの、1989年以降に国家的規模で「文化的インフラストラクチャー」を作り出し、同国経済成長に見合う新たな国家的アイデンティティを確定することを目指してポーランドで実現された作品を、よく記録した本である。今回取り上げるのはKWKプロメスが実現した建物で、約2,110m<sup>2</sup>もの屋内空間をもたらした。展示面積は960m<sup>2</sup>に及び、国立博物館のうちシュチェチン現代史に捧げたセクションが置かれる計画である。この空間は広場の地下に作られた。その輪郭によって、かつて1970-71年の労働者蜂起を記念したモニュメントしか建っていなかった平地が大々的に

改変された。広場の上に立つと、「ゴシック的」なヴォリュームと特徴的な半透明の被膜で構成されたミエチスワフ・カルウォーヴィチ・フィルハーモニーと向かい合う。KWKプロメスの建物は、何もない空間の継続に見える。わずかに波打った平面が最も低いところから1つのスロープのように隆起し、最も背の高い尾根に到達する。広場の片側は、バロツィとペイガが設計したフィルハーモニーに切り取られている。

傾斜した平面が一番高くなる三角形の角に博物館の出入口部分が切り取られ、展示室や館内施設と広場をつなぐ媒介空間が設けられた。博物館の2層を覆う鉄筋コンクリートの連続した硬い表層は大寸法のコンクリートパネルで構成された。この表層から突き出た矩形の要素

はベンチにもなる。こうして緑地から徐々に鉱物的な平面に変化し、それが隆起するにつれて両端を切り取られた左右対称のファサードが現れる。このファサードは、建築家たちが建物に雄弁すぎる象徴的な価値を付すことを避けつつ全体に行き渡らせようとした、目を引く形態のコントロールとよく合致した造形である。

都市のこの一角が孕む象徴的な意味に、KWKプロメスは寡黙さを対置した。その最大の表現となるのが、同寸法の重いコンクリートの扉の連続として形づくられた開口部のデザインである。この扉はピボットを軸に回転できる。そのため、新築のフィルハーモニーを背にして博物館を眺めると、構成要素の反復性にもかかわらず変化を受けやすいファサードのついた建物に見える。反復する

# CASABELLA JAPAN ニュース

## 2016年ミラノサローネ報告

上田敦子[ASJ]

第55回ミラノサローネ国際家具見本市が、4月12日(火)から17日(日)までロー・フィエラミラノにて開催された。今年はサローネ国際家具見本市、サローネ国際インテリア小物見本市と隔年開催されるエウロクチーナ(サローネ国際キッチン見本市)、FKT(テクノロジー・フォー・ザ・キッチン)、サローネ国際バスルーム見本市とサローネサテリテ(毎年開催)が併せて開催された。厳しい審査を通過した出展社数は2,407社、うち国外からの出展が30%を占め、出展面積は207,000m<sup>2</sup>にも及ぶ。期間中の来場者は372,151人で、同じくキッチンが開催された2014年度と比較して4%増という伸びを示した。2015年ミラノ国際博覧会の成功の反響か、会場には例年以上にさまざまな国、多様な人種の来場者で溢れていたように思われた。土日のみ一般にも開放され2日間での来場者数は41,372人。海外からの業界関係者の来場数は全体の67%に上り、国際的な見本市として注目され続けていることを示している。

ミラノサローネは、2015年12月にアメリカの「デザイン・マイアミ/アート・バーゼル(スイスの国際アート見本市が2002年よりマイアミでも開催)」に初出展参加した。2016年11月には中国の上海にて第1回サローネ・デル・モービレ上海を開催する。ここ数年来、イタリア家具業界の中国市場への注視は目をみはるものがあり、ロシアで成功を収めている



大勢の来場者で溢れるロー・フィエラ見本市会場



会場内に設置された  
55周年のロゴ



カルテル社の展示ブース

「イ・サローネ・ワールドワイド・モスクワ」に続き、世界最大規模の市場へと成長した中国を標的に定めた。家具の見本市出展社に話を聞くと、中国では単品ではなく部屋全体をコーディネートした家具を含むインテリア一式をまとめてオーダーするという。華美な高級素材が好まれ、また歐米並みの広さの住宅を保有する富裕層も多く、家具メーカーの取引における中国の占める割合は必然的に大きくなつたといふ。

一方で本国のイタリアは、2015年の経済成長率0.74%と2011年以来、4年ぶりのプラス成長を遂げた。2015年の総輸出高の6%を家具業界が占めるなど近年勢いを取り戻してきており、業界には明るい兆候が表れている。今年の見本市会場においても、イタリア国内からの来場者や商談結果にも例年にはない好調な動きがあったようで、先行きの見通しは明るくなってきたというところか。今年もレンツイ首相が見本市会場を訪問し、また20年ぶりとな

るミラノ国際トリエンナーレも同時期に開催されるなど、国と市双方あわてこのミラノサローネの支援体制をとっている。

本号では見本市会場で行われたサローネ国際家具見本市を中心に見本市の模様を紹介する。

### [クラシックへの回帰]

55回目となる2016年は、55の数字と3原色そして白を使ったモダン・クラシック調のデザインのロゴも加わった。メインとなる家具見本市をはじめ各見本市のブースでは、デザインや設えにより一層力が入ったようだ。今年カッシーナのアートディレクターに招かれたのは、パトリシア・ウルキオラ。ウルキオラ氏というとモロゾ社やB&B社、カルテル社とのコラボレーションのイメージが強いが、今年は異なる企業とのコラボレーションが実現した。コンクリート・ブロックという建築的要素を取り入れてブースの壁とした。白く塗られたブロックは仕切りの役割を担うだけでなく、素材の



New design 01 | 02 | 03 | 04 | 05



06 | 07 | 08 | 09 | 10



隙間を上手く利用し抜け感も表していた。毎年20号館の入口を魅力的に飾るカルテル社は、デザイナーごとに小さなブースを造り、各デザイナーの顔が入口となり、その中にそれぞれデザインした商品群を展示していた。シックなブースを構えるのは、ポリフォルム社。ブースの外側は黒の焼杉で覆われ、凛とした佇まいを見せる。どこか日本の旧家の傍を歩いているように感じさせる。昨年に引き続くデザインだが、キッチンの「ヴァレンナ」も同様の外観で統一されブランドイメージとしてのまとまりをみせている。

商品群に目を向けると、モダン・クラシックともいべきどこか懐かしさを感じさせるデザインが多く見られる。クラシックといつても形そのものは装飾的ではなく、1930年代から50年代、また70年代・80年代のモダン家具デザインを振り返り、現在へと形状をつないだ普遍的なデザインといえよう。椅子やソファの座面など身体が直接触れる部分は柔らかく丸みを帯び、より一層身体を委ねさせたいイメージを見る側に与える。一方、脚部はより細く、シンプルで存在感をなくし、全体のイメージをソフトに仕上げている。ポリフォルム社のアームチェア「Marlon(マーロン)」は50年代にフランコ・アルビーニがデザインした「フィオレンツァ」(アルフレックス社)を思い出させる。シンプルなクロスの脚部に座面からゆったりと後方に背が伸びた一人掛けの椅子である。またカッシーナ社の「ビーム・ソファ」は、ウルキオラによるデザインである。彼女が師事したマジストレッティの「マラルンガ」の進化形のようだ。「マラルンガ」は背部

分の折り曲げが可能だが、「ビーム・ソファ」は、アームも柔軟に曲がるデザインになっている。

今年らしいスタイルとして、マジス社の「Milà(ミラ)」チェア、プランク社の「Remo(レモ)」チェア、カルテル社の「Piuma(ピューマ)」チェア、そしてnendoがデザインしたMDF社のスツール「Sag(サグ)」などが挙げられる。ピエロ・リッソーニがデザインした「Piuma(ピューマ)」は重さが2.2kgと軽量で、椅子の座面の厚さが2mmと非常に薄い構造である。デザイナーとメーカー側との2年に渡る試行錯誤の末に、このデザインが実現したという。背もたれ部分と丸い座面、そしてアームが一体となっており、素材にはカーボンファイバーが含まれている。モルテニ社から出されたテーブル「Asterias(アステリアス)」は革新的なテクロノジーにより制作された。大きな丸い天板を支えるのは、ごつごつとした大木の幹のような脚部。彫刻のような複雑な形状の実現は3Dを駆使した結果だという。

80年代のノスタルジックなスタイルを継承する新作としては、ポッコ社の「Voyage(ヴォヤージュ)」チェアが挙げられる。インドの伝統的なラグ、ダーリを現代風にアレンジした椅子で、木製の本体にデッキチェアのように背面と座面を革で覆っている。またポルトローナ・フラウ社から「Lloyd(ロイド)」という名の本棚が発表された。日本の格子戸を思わせるスライド式の木製引き戸の本棚である。

過去のデザインへのオマージュとしては、カッシーナ社から1935年にデザインされた「ユトレヒト」ソファが新しい

貼地で発表された。どこか懐かしさを感じさせる色合いで、色彩をまとった積木が重りあったようなデザインだ。オランダの若手デザイナー、ベルトイアン・ポットによる、3種類の特殊なジャカード織のテキスタイルで、限定生産だとう。カール・ハンセン&サン社からは「CH22」ラウンジチェアが登場。1950年にハンス・J・ウェグナーがデザインした復刻版である。また当時デザインされたまま未発表だった幻のウェグナーチェアと呼ばれていた「CH26」も併せて登場した。アルテック社からは「ドムス・チェア」が70周年として発表。イルマリ・タピオヴァーラがデザインし、1950年にアメリカ・ゴールド・デザイン賞を受賞している。カッペリーニ

- 01: Milà /ハイメ・アジヨン/マジス
- 02: Remo /コンスタンティン・グルチッチ/プランク
- 03: Piuma /ピエロ・リッソーニ/カルテル
- 04: Sag /nendo/MDF
- 05: Asterias /パトリシア・ウルキオラ/モルテニ
- 06: Self Bold /ジュゼッペ・バザーノ/スマデージオ
- 07: Commodore /ピエロ・リッソーニ/グラスイタリア
- 08: Marlon /ヴィンセント・ヴァン・ダイセン/ポリフォルム
- 09: Voyage /ガムフラテージ/ポッコ
- 10: Lloyd /ジャン・マリー・マッソ-/ポルトローナ・フラウ
- 11: Beam Sofa /パトリシア・ウルキオラ/カッシーナ
- 12: Avio /ピエロ・リッソーニ/クノール
- 13: Gemma /ダニエル・リベスキンド/モロゾフ
- 14: Glove-Up /パトリシア・ウルキオラ/モルテニ
- 15: Tabour /ドーシ・レイエン/B&B
- 16: CH22 /ハンス・J・ウェグナー/カール・ハンセン&サン
- 17: Domus Chair /イルマリ・タピオヴァーラ/アルテック
- 18: Utrecht /ヘリット・トマス・リートフェルト/カッシーナ
- 19: Platner Lounge Chair /ワーレン・プラター/クノール
- 20: Tube Chair /ジョエ・コロンボ/カッペリーニ



11 | 12 | 13 | 14 | 15



Hommage 16 | 17 | 18 | 19 | 20



Materials 21 | 22 | 23



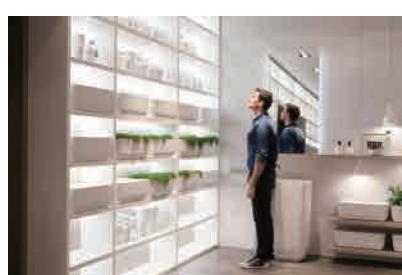
Kitchen 27 | 28



Outdoor 24 | 25 | 26



FKT 29 | 30 | 31 | 32



Bagno 3 | 4

Satellite 5 | 6 | 7

社からはジョエ・コロンボの「チューブ」チェア。名前が示すようにチューブ形の筒が組み合わさる鮮やかな色の椅子である。クノール社からは「Platner」が脚部にゴールドメッキを施した新しいヴァージョンとして発表された。エレガントな貴婦人の品格を感じさせる。いずれも20世紀の各時代を代表するデザインで、これらを並べてみるとデザイン史を垣間見ているようでもある。

#### [素材、より本物志向へ]

素材はより厳選された本物志向への傾向が続く。数年来続く大理石の使用は今年も多く見られる。引き続きテーブルやサイドテーブルの天板として、さらに今年はソファに付随するテーブル部分やキャビネットの天板としても使用されている。石の種類もカッラー・ラ・ビアンコに代表される白をベースにした大理石から、緑や茶の模様の入った

貴重で高価なものまで、さまざまな大理石が使用されている。木の素材もマホガニーをはじめウォールナット、チエリー、オークなどの高級素材が多用されている。テーブルやチェストなどの仕上げにはラッカー仕上げのものも多い。レザー素材も今年もあらゆる部分に使用され、ソファや椅子をはじめ、ワードローブやチェストの引き出し、あるいはデスクの上部を覆う素材にも贅沢に使用されてい